

世界の深淵を巡る大冒
険は最弱種族と鬼畜ハ
イエルフのボディシェ
アから

おま風

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最弱種族にして『人種ツリー』の最下層である、第八階層に分類される人族の青年リ
オンは、亡き友との約束を果たすべく世界を旅して回っていた。ある日、大陸南東部に
位置するダムディリアス帝国の地下で、不思議な空間に幽閉されたハイエルフの少女
マーリーと出会う。助けを求める彼女を救い出すリオンであつたが、解放するや否や豹
変したマーリーに命を狙われることに！

強力な暗黒魔術から死に物狂いで逃走するリオン。そんな中、突如として巨大な魔術
陣が出現し二人は強烈な光に包まれる。

《貴様が潔く死ぬから、呪いが発動してしまったではないか。この、大馬鹿ものがあ

！』

気付くと、そこにはさらさらの黒髪を携えた華奢な美少女、先ほどまで確かに自らを殺そうとしていたハイエルフの暗黒魔術師、の姿をした自分がいた。

——『世界の深淵』を巡り、多種多様な種族の思惑が交錯する長編ファンタジー。

この作品は、他サイトにも重複投稿しています。

目

次

00序章
01第一章
1

22 1

〇〇序章

燃え盛る炎が、俺の視界を覆いつくしていた。頭ががんがんと痛み、思考が定まらない。視界もぼやけている。額に手をやると、ドロツとした感触がした。嫌な予感がしたが、恐る恐る額にやつた手の平を眼前で開く。

ああ、ご明察。案の定、真っ赤に染まつた手の平。かなりの出血量だつた。周りの景色も最新の記憶と比べると様変わりしている。一体、どれだけの時間気を失っていたのだろう。恐怖し逃げ惑う人々の悲鳴や、慈悲を求め助けを吃う声はもう聞こえない。

種族的強者による一方的な蹂躪。世界最大の大陸ダイロクスの南東サスクワ地方の山の中にある、人族のみが通う魔術師育成学校を、獣人族で構成された盗賊集団が襲撃したのだ。魔術の心得があるとはいっても、最弱種族である人族では到底優位種族に敵うはずもなく、故郷を失つてから十五年間、幼馴染のサンと共に身を寄せていた思い出の場所は、たつた数時間の内に跡形もなく焼け落ちた。幸か不幸か気絶している間に、殺戮と強盗の嵐は過ぎ去つたようで弱者を狙う狼や虎の姿をした性悪人間どもの姿は見えなくなつていた。かつては立派な三階建ての建造物の一部であつた木材がごーつぱちぱちと酸素を燃焼し朽ち果てていく音が四方八方から聞こえてくる。先ほどから、

息苦しいわけだ。俺の脳みそが明確な酸素不足を訴えかけている。ごほつごほつと肺に流れ込む熱気に噎せ返りながら、さらりに辺りを見渡す。学校は全壊。屋根は全て剥がれ落ち、壁の大部分は焼け落ちて炎を纏いながら地面に横たわっている。施設近辺の木々にも燃え移ってしまっているようで、どの方角を見ても火、火、火であつた。そのため、周囲の温度はかなり高かつた。視界は立ち上る煙のせいと遠くまでは見えないが、上空に広がる暗闇とは対照的に明眞としていて、比較的良好であつた。俺が倒れている場所は、体全体で感じる土の感覚から察するにおそらく中庭だろう。施設内で建物の下敷きにならずに済み、なおかつ丸焼きになることなく気を失える場所と言つたらそこくらいだ。それに、そもそも授業にまじめに参加することの方が圧倒的に少なかつたのだから、とりあえず教室ではない。そして、視界に映るほとんどの物が燃え盛る中まつたく動じることなく威風堂々と佇む禿げた誰かさんの銅像と目が合つた瞬間に、それは確信へと変わつた。

自分の置かれている状況がある程度把握できたところで、体に異常がないかの確認も兼ねてゆっくりと立ち上がるうとしたが、そこでようやく足元に何かが転がつていることに気づいた。俺は、さつと後ろを振り返り驚愕した。

「サンっ!!」

そこには、仰向けの体勢で倒れている幼馴染がいた。俺の呼びかけに対してサンの応

答はない。さあ一つと、血の気が引いていく感覚がした。

「おい！ サン！ 大丈夫か。しつかりしろ」

体の怪我とか火傷とか、そんなものを気にしている場合ではなかつた。俺は、俯せの体を反転させて上体を起こし、倒れこむサンの頭を左手で支える。そのまま右手でサンの体を引き寄せ、膝の上で抱きかかえるような形で呼びかけた。

「返事をしてくれ。サン」

サンは、ひどい傷だつた。胸部を鋭利な刃物のようなもので深々と切りつけられている。おそらく、獣人族の爪によるものだろう。そこ以外にも、体の至る所に裂傷箇所が発見できた。一目瞭然ではあるが出血もひどいようで、いつもならとめどなく憎まれ口を吐きだす活き活きとした唇は生気が抜け青白く変色していた。まだ体が消滅していないということは死んではいないようだが、周囲の熱気とは正反対に抱き寄せたサンの体は冷え切つていた。口元に耳を近づけると、かすかだが呼吸をしているのが確認できた。

「サン。こんなところで絶対に死ぬんじゃねえぞ」

俺はサンを抱きかかえながら、助ける方法はないかとあたりを見渡した。だが、見えるのは木材と炎だけで、役に立ちそうなものは何もなさそうだった。助けを呼ぼうにもこの惨状では俺たち以外の生存者はおそらくもう、

例えいたとしても、何かができるという訳もない。所詮は人族。人種ツリーの最下層。第八階層に位置する最弱の種族だ。この傷を癒せるほどの高位の魔術を使える魔術師がこの学校にいるとは考えづらい。

「くそ。なんでだよ」

自分の無力さが悔しかつた。十五年間、俺は何をしてきたんだ。魔術の才能は皆無で落ちこぼれと呼ばれ、捻くれて不貞腐れて授業もまともに受けず現実逃避ばかりしてきた。それに比べてサンは魔術の才能に恵まれていた。人族では一握りしか習得することができない第参級魔術を十八歳の若さにして習得し、学校創立以来の天才と称され未来を有望視されていた。俺は親友であり家族のような存在であるサンが評価されることが誇らしくて、嬉しくてそれで満足していた。自分もサンと一緒に進歩し成長していくのだと錯覚していた。俺は何も変わつていなかつた。十五年前のあの日から。故郷を失つたあの日から。俺はずつと逃げ続けてきた。

「兄貴が、いてくれれば」

無力さと悔しさに耐えきれなかつたのか瞳から自然と涙が零れ落ちる。俺は拳をぎゅうっと握りしめ、何とか現状を開拓する方法はないかと思考を巡らせた。サンの『死』に対する恐怖と絶望が眼前にまで迫つてきていた。そんな時、

「兄貴が何だつて。オーリンが、いなくて、も、君は、とても素晴らしい、存在だよ」

苦しそうに途切れ途切れで言葉を紡ぐサンの声が聞こえた。その声はとても弱弱しかつた。

「サン。気が付いたのか。何とかして、今助けてやるからな」

俺は、虚ろに薄く開かれたサンの目をしっかりと見つめ、右手でサンの力なくだらりと垂れ下がった両手を自分の胸の辺りに引き寄せ強く握りしめた。絶対に助ける。何があつても、こいつだけは。そう決心していても、正直解決策は闇の中であつた。残された時間は少ない。今この瞬間にもサンの命の灯は消えかかっている。焦りが俺の頭を支配していた。何とかしなければ、でもどうしたら良い。そんな堂々巡りが先ほどから永遠とめぐつてはいる。焦れば焦るほどに考えがまとまらず、さらに焦りを募らせた。絶望がすぐ背後まで接近している気配を感じながら、俺は為す術なく「絶対に助けてやる」と繰り返すことしかできなかつた。こんな時に、兄貴ならどうするのか。十五年前のあの日、俺とサンを絶望的な死地から無事救い出した兄貴。俺と同じ人族でありながら、豊富な知識と的確な判断力で、どんな問題も即座に解決してくれた頼れる存在。あの日、迫りくる狂気に怯えていた幼い俺達に兄貴は「絶対に助けます。」そう力強く約束した。俺にもできるのだろうか。大切なものを守ることが。目の前で死にかけた大切な家族を助けることが。

だが、現実というものはとても非情で、俺にそんなチャンスを与えてくれることもな

ければ、超常的で神秘的な奇跡が起きることもなく、その時はあつさりと訪れた。

右手で握りしめていたサンの両手に力がこもり俺の右手からするりと抜けだして、そのまま俺の両の頬にまるでとても大切で壊れやすい宝物を支えるかのようにそつと触れた。その手は、優しくそれでいて力強かつた。

「リオン。聞いておくれ」

「おい。そんな」

俺は、そこで察知した。終わりが来たのだと。タイムアップだ。涙で溢れているのであろう俺の瞳を真剣に見つめるサンの瞳がそう告げていた。唇がわなわなと震え、脳が思考を鈍化させ、適切な言葉が全く思い浮かばない。

「君は、とても素晴らしい存在だ。僕の、誇りだよ」

サンは、ごほつごほつと苦しそうにせき込む。

「サン。無理するな。しゃべらなくていい」

「いや、伝えたいんだ。これだけは」

「怪我してんだ。しゃべると傷が開くぞ。せつかく塞がつてのに、また開いちまう」

俺は、なぜかばればれの嘘をついていた。我ながら見事に無様な嘘だ。学長直々に「魔術の腕でお前に劣る奴はいないが、口先でお前に勝る奴はいない」と言わされた俺様がこの様だ。悔しくて、涙が止まらない。

「君は、こんなところで終わるような器ではないよ。君は、何にでもなれるんだ。いつか、世界を救う英雄にだつてなれるだろう」

「買い被り過ぎだろ。俺は、そんなすごい人間じやねえよ」

「いや、誓つてもいい。この命に賭けて」

「おいおい。洒落にならないだろ。この状況でかけるなよそんなもん」

「はは。そろそろ本格的にやばいかも」

「冗談やめろよ。相変わらず嘘が下手だな。こんな切り傷ごときで人が死ぬかよ。調理実習の時に、ほらあいつ。名前なんていつたつけ。デブでいつも汗かいてたやつ。俺の席の斜め後ろのさ」

「レイブンかい」

「そうそうレイブンだつた」

「君はあいかわらず人の名前を覚えないよね」

「仕方ないだろ。ほとんど教室にいなかつたんだから。でき、調理実習の時に、レイブンの美味そうな横腹をフオーラでつついて、驚いたあいつが落とした包丁で脛きつた時あつただろ。その時の俺の方が今よりずっと大怪我だつたぞ」

「ふふ。そんなこともあつたね」

「ああ。だからさ。もうしやべるなよ」

これ以上、サンの言葉を聞くのが堪えられなかつた。最後まで聞いてしまつたら、本当に最後が訪れてしまう。そんな気がして。

「それはできないよ」

「しゃべるなつて」

嫌だつた。これ以上、失うのは絶対に嫌だつた。

「聞いてくれ」

「嫌だ」

「リオン」

「もういいつて。しゃべらなくて良い。しゃべらなくて良いから、死なないでくれ」

喉の奥から絞り出した本音は、自分でも驚くほどに弱く掠れていた。そんな俺の右手を、サンの両手が包み込む。

「約束だ。君はこれから、何があつても生き残るんだ。この過酷な世界で絶対に生き残つて、種族を超えた沢山の仲間を作つて、そしていつか英雄になるんだ。急がなくても良い。ゆっくりで良い。その時は必ず来る」

ふつとサンの両手から力が抜ける。そのまま重力に従い落下するサンの腕。俺は、それをただ目で追うだけで何もできなかつた。

『世界の深淵』で、君を待つよ』

「サンっ!!」

がくつと唐突にバランスを失うサンの体を支えようと、咄嗟に伸ばした俺の右手がサンに触れることはなかった。一瞬で重さを喪失したサンの体が、世界の理に則り跡形もなく消滅したのだ。後には、サンが着用していた衣類のみが残つた。俺は、先ほどまでそこにいたはずのサンの存在を確かめるように力いっぱいにそれを抱きしめ、目を閉じる。

「サン。俺は、絶対に生き残るぞ。お前との約束を守るため。英雄になる云々は無理だと思うけどさ。なにがあつても生きてやる」

「あなたの胸の奥に、憎しみはないのですか」

「!!」

突如、背後から声がして目を開けた。そこには、先ほどまでの凄惨な景色は跡形もなく、ただただ暗闇が広がっていた。噎せ返るような熱気もなければ、音もしない。單なる暗闇。腕の中にあつたはずのサンが着ていた衣類もいつの間にかなくなつていた。あまりの急展開に情報処理能力がおいてけぼりを喰らっていたが、一番驚愕すべきはそこに入った人物であった。

「兄貴」

数cm先も認識できないほどの濃い闇の中、兄貴ことオーリンの姿だけはしっかりと認識できた。俺より十歳ほど年上で、身長百九十cmと人族にしては長身。物腰の柔らかい落ち着いた言葉遣い。十五年前に故郷を抜け出す際に全身に大火傷を負い、その痕を隠すために真っ白なローブに身を包み、真っ白な仮面を被つた独特的のシリエット。あの夜から一度も兄貴の素顔を見たことはないが、こんな奇抜な格好をした人物は兄貴しかいない。さらに、故郷に咲いていたパルムンの花の香りがしたのが、それを確信付けた。

兄貴は、好んでこの香りの香水を使つてゐる。

「なんで、こんなところに」

当然の疑問だつた。つい数分前まで、俺は学校にいて、そこでサンを失つた。何もしてやれずに。ただサンの命が尽きるのを眺めていた。自分の無力さが、無能さが惨めで情けなくて、せめてサンとの最後の約束だけでも守ろうと心に決めた。そこに兄貴はいなかつたはずだ。兄貴は一年に二、三回しか学校には立ち寄らない。世界を旅して、助けを必要とする人族を救つて回つてゐるからだ。

「兄貴？ 聞いてんのか？」

兄貴の返答はない。こちらに顔を向けたまま、不気味なくらい微塵も動かなかつた。俺は状況が飲み込めず、様子を伺う。しばらくの沈黙。

「あなたの胸の奥に、憎しみはないのですか」

すると、兄貴は再び同じ問いかけを繰り出してきた。俺はこの問いかけに、違和感を覚えた。聞き覚えのある問いだ。ああ。なるほど。それもそうか。

そこでようやくすべてに合点がいった。この言葉は、数年前に兄貴が学校を訪れた夜に直接尋ねられたものだ。たしかその時俺は、「ある」と答えた。それを聞いて兄貴はこう続けた。

「復讐をしたいと思いませんか。私達から故郷を奪つた帝国に」

目の前の兄貴が頭に描いたものと一言一句同じ言葉を紡ぐ。

「いや、それはない」

俺は、あの時もこう答えた。

「そうですか」

兄貴は少し残念そうに頷く。あの時は、すぐに別の話題を振られ、それ以降この話が会話の議題になることはなかった。

思えば、先ほどから不自然なことは何点かあつたな。

ふう一つと、俺はゆっくりと息を吐きだすと再び目を閉じる。そして、強く念じた。

「起きろ！　俺」

体がだるい。背中が冷たい。床が硬い。あと、寒いしなんか臭い。

「・・・」

おはよう、俺。目を開けると現実がいた。冷たい金属の床に直に寝そべり、布団はない。周囲からはごー一つごー一つと、獣の唸り声のような鼾が聞こえてくる。正面に見えるのは天井。それほど高くはない。四メートル程度か。視線を上、左、下と順番に移動させる。壁だ。それも、ただの壁ではない。壱級対魔術鉱石であり世界一硬いと言われるヴィルライト鉱石が混ぜ込んである特注品だ。巨人族の腕力でもびくともしない程の頑丈さと、魔術に対する絶対的な耐性。つまるところ、世界で一番丈夫な壁だ。ちなみに、左側の壁の上部には同じ鉱石で作られた格子が設置された、縦横二十センチ程のサイズの窓がついていた。そして、右側には等間隔に並んだ格子。もちろん、人が通り抜けができるような隙間は空いていない。

そう、ここは天下のダムディリアス帝国が誇る重要な犯罪人を投獄する牢獄だ。帝国の兵士の話では、この建物は『帝都第参監獄』と呼ばれているらしい。

「さすがに、これは現実だよな。はは」

俺は、この絶望的な状況をなんとか受け止めようと努力した。

それにしても、嫌な夢だつた。いや、夢というよりは記憶の断片。かなりリアルだった。獣人族の襲撃によりサンを失つてから約二年。俺はある惨事の後、ひつそりと山を

下り、比較的弱い野生モンスターが生息するこのサスクワ地方で各地の村々を巡りながら必死で生きてきた。いくらモンスターが弱いと言つても、魔術も剣術も体術もろくに使えない俺にとっては、遭遇しただけで即刻命の危機の到来であつた。この二年間で、サスクワ地方全域に幅広く生息し全モンスターの中でも最低ランクだと言われるホーラビやスライムに何度も殺されかけたことか。我ながら、よく今日まで生き延びることが出来たものだ。俺はかなりの幸運の持ち主のようだ。普通の人族であれば、十人ほどのパーティを組んだとしても旅の開始一週間くらいで全滅だろう。それほど、外の世界は厳しい環境なのだ。一瞬の油断や、躊躇により取り返しのつかない代償を払うことになる。まあ、これまでの様々な経験のおかげで外の世界で生きぬく術を学ぶことができた。サバイバルについては、もうプロフェッショナルといつても過言ではないかもしない。

だが、現在の状況は最悪だ。まったく打開策が思いつかない。体は自由だ。牢屋に入れられる前に枷は外された。立つことも歩くことも可能だが、この牢獄から脱出する方法がまったく思いつかない。投獄されてすぐの頃は試しに壁を殴つてみたりしたが、まあ、結果は火を見るよりも明らかだつた。上位種族である巨人族でさえ壊せないのだ。そもそも俺ごときになんとかできる代物ではなかつた。唯一の救いは、一人部屋だということだろう。周りから聞こえる大型モンスターの唸り声のような鼾。一枚、いや

もつとかもしれない、壁を挟んでもこの大音量だ。相部屋だつたらと考えるだけで血の気が引いた。

「はあ、どうしたものか」

このまま、投獄された状態で事態が収まるのを待つのも良いが、果たして無事釈放という訳にいくだろうか。あれ程のことをしでかしたのだ。下手したら死罪の可能性も零ではない。

「こんなところで死ぬ訳にはいかないんだけどなあ」

俺は寝転がつたままの体勢から動く気も起きず、天井を見つめながらぱつりと呟いた。

《起きたか小僧。随分と麁されておつたようじやのう》

ふいに、少し高めで澄んだ少女の声が頭の中に直接語りかけてきた。

「ああ、おかげさまでな。あと、俺は小僧じやなくてリオンだ。大年増」

《なんじやと。誰が大年増じや。口を慎め、愚か者が。この傲慢な下等種族め。確かに、お主達人族と比べるとわしは長い年月を生きてはいるが、まだぴちぴちの可憐な少女じやわい。それに、わしにはマーリーという高尚な名がある。きちんと名で呼ばぬか。不敬じやぞ。大馬鹿者》

おお、おお、そこまで言うか。罵詈雑言のオンパレードですね。

俺の頭の中に寄生虫のように巣食うマーリーこと、自称『可憐な少女』はハイエルフという種族の魔術師だ。ハイエルフは、エルフの上位互換のような種族で膨大な魔力を保有しており、巨人族や龍人族と同じように上位種族として広く知られている。人種ツリーにおいては第参階層に位置し、個体数はそれほど多くはない。同種族のほとんどは魔術師であり、エルフを含む中位種族以下の種族が第肆級魔術、特別に強い個体でも第参級魔術までしか使用できないのに対して、ハイエルフの全個体は第参級魔術以上の魔術が使用できる。また、他にもエルフとの違いとして挙げられる大きな点は、全体的にステータスが一回り強化されていることと、平均的に五百年から八百年生きると言われるエルフよりもさらに長寿で、だいたい千年から千五百年の年月を生きるということだろう。人族の短い人生からは考えられない程の途方もない時間を生きるハイエルフ。上位種族であり、目立つた天敵もいない彼等の死因の大多数は自殺であり、目立つた目的や確固たる野望がない個体は人生を全うする前に生きることに飽きて自ら命を絶つという。色々な意味で恐ろしい種族である。

ちなみに、大陸最大の帝国であるここダムディアリオス帝国を統治するのもこのハイエルフだ。現皇帝であるジエイクは代々ダムディアリオス帝国の皇帝を継承している由緒あるハイエルフの家系であり、その配下で帝国の全軍事力を指揮する絶対的な権限を持つ軍事総司令官はかつて魔人族との戦争の際に『帝国の七英雄』として活躍したハイエ

ルフ、『大英雄』ジングである。

「はいはい。マーリー様万歳」

俺は、理不尽なマーリーの激昂に適当に返事をしておいた。しかし、当のマーリーはかなり満足したようで、『分かれば良いのじや。小僧よ。この偉大なるマーリー様を讚えるが良いぞ。ぬわははは』と、高らかに奇天烈な笑い声をあげていた。ああ、俺は小僧のままなんですね。

マーリーは、約三百年近く生きていると言つていた。人族で言うと十五歳くらいだろうか。その割には単純というか、ちよろ過ぎるというか。

『それにも小僧』

「ん。どうした」

『この牢屋を見ると、つい先刻までのわしに戻つてしまつたようじやの』

「何を言い出すかと思つたらお前は。はあ。誰のせいでこんなことになつたと思つているんだ」

俺は、胸の奥底から湧き上がる怒りを深いため息に変えて吐き出した。俺がマーリーと出会つたのは、つい数時間前のことであつた。初めて彼女を見た時は、運命だと感じた。ただただ無駄に広い何もない空間の真ん中で、小さな檻に閉じ込められ涙で目を潤ませながら、上目遣いで俺を見つめる幼き少女。まさか、その儂い姿を見ただけでこん

な横暴な奴だと誰が思うだろう。まあ、見事に騙された俺も大概ではあるが。今思ふと、運命だと感じたあの時の俺を殺してやりたい。運命なんかではなく呪いだつた。后悔後に絶たずとはこのことだろう。

「だいたいなあ」

俺は、小言の一つでもいつてやろうかと、上体を起こし頭をかきながら口を開いた。
ちようどその時、

「ハイエルフの餓鬼が。まだ起きてたのか」と、突然格子の外側から話しかけられた。
ハイエルフ？　ああ。俺のことか。俺は、声のした方に顔を向けた。そこには帝国の鎧を身に纏つた兵士が立つていた。がたいが良く、身長も高い。おそらく見回りの兵士だろう。暗い牢獄内をランプも持たずに巡回しているところを見ると、暗視の魔術でも使つているのか。

「どうも眠れなくてな」

「そうか。まさかとは思うが、何か悪巧みでも考へてゐる訳ではないだろうな。」

兵士はかなり警戒をしているようであつた。まあ、仕方ないことか。腰に刺してある角笛に右手をかけ、いつでも取り出せるようにしてゐた。兵士が持つ角笛は、おそらく『ファブリスの笛』という第肆級魔道具だ。確か効果は、吹くと角笛に名前を記した者のみに聞こえる音が鳴るだつたか。角笛に記されたおびただしいほどの名前を見る限り、

一吹きでとんでもない量の兵士が駆けつけることだろう。

この体になつてから、俺はかなり夜目が聞くようになつた。人族の体であつた頃は、真つ暗で何も見えなかつただろうが、今は暗闇の中でも目の前の兵士の顔の皺まで確認できる。

ああ、そういうえば今の俺の見た目は、人族ではなくハイエルフ。より正確に言えば、マーリーの体そのものになつてゐる。こうなつた理由を話すと、長くなるのだが。今はまず、この気まずい状況を打破しなければ。さて、どう返答したものか。

『のう小僧。そろそろ抜け出すとするか』

俺が兵士に對して何か上手い言い訳はないかと思考を巡らせていた時、マーリーが突拍子もないことを語りかけてきた。

「な、抜け出すつてお前。あつ」

思わず、返事ををしてしまう俺だが、言い終えてからはつとした。

「貴様！ 今抜け出すといつたか」

しまつたー。心の中で頭を抱え崩れ落ちる。兵士は完全に臨戦態勢だ。角笛を腰から抜き、いつでも吹けるようにしている。くそお。マーリー。この野郎。後で覚えてろよ。後があればだけど。

「いや、ヌケダースンつて言つたんだ。俺の故郷の挨拶みたいなものさ。はは。」

苦しい。あまりにも苦しい言い訳だ。体から変な汗が滲み出してくるのが分かる。

「ヌケ、ダースン？ 聞いたことないぞ」

ですよね。今思いついた言葉ですから。兵士の顔は相変わらず険しい。

『何をしておる小僧。交代じや。抜け出すぞ』

マーリーは、俺の焦りなど気にしていないようであつた。

「できるのか」

俺は、こちらをきつと睨みつける兵士から視線を逸らさずに小声でささやく。

『わしを誰だと思つておる』

自信満々のようだ。

兵士は、「何をこそそとしている」と、今にも仲間を呼び出しそうな勢いでこちらを伺つている。兵士を言いくるめてここをなんとか凌いだとしても、釈放が待つているとは限らない。下手したら死罪だって有り得る。賭けるか。このハイエルフの少女の姿をした悪魔に。

「一つ、約束してくれ」

俺は、一大決心をしてマーリーに提案した。この短期間で俺はどれだけの回数の一大決心をしただろう。感覚が麻痺して馬鹿になつてゐるのかもしれない。こんな大博打。冷静だった頃の俺なら絶対しなかつただろうに。

「この兵士も含めて、だれも殺さずに事を運んでくれ」

《ぬわははは。優しいのう。承知したぞ。わしに全て委ねるとよい》
はあ。本当に大丈夫だろうか。まあ、もう取り返しづかないが。そして俺は、体の支配権を完全に手放した。

「な、何をした。貴様」

兵士は、俺の気配が変化したことを探知したようであつた。角笛を握る手に力がこもるのが見えた。

「ふふふ。ぬわははは。怖いか。この偉大なるマーリー様が。やはり自分の体はしつくりくるのう」

俺が手放した体の支配権は、現在マーリーが所有している。高らかに笑い声をあげ、すくっと立ち上がるマーリー。

「感謝するが良い。本来なら、貴様のような下等種族など、わしの暗黒魔術で消してしまうところだが、小僧と約束したのでな。生かしておいてやろう。おつと、角笛を吹くつもりか。だが、残念じやな。控えておる間に、魔術陣の形成は完了しておるわい。ぬわははは」

《随分と楽しそうだな》

マーリーは、狼狽する兵士の姿を見て舌なめずりをした。まったく、性格が悪いやつ

だ。

「この、餓鬼め。何をしようとしているかは知らんが、この牢獄からは一步も出さんぞ」
兵士は、急激に高まるマーリーの周囲の魔力に危険を感じたのか、角笛に口をつけ思
い切り空気を吐き出した。その瞬間、ざわざわどたばたと牢獄内の至る所から物音が聞
こえ始める。

「潮時か。それではのう、下等種族ども。ステイトチエンジマジック ダークネスマス
ト」

その瞬間、俺達の体は平衡感覚を完全に失い、固体という概念を捨てて四散した。

「安心せい小僧。次は捕まらぬよ。ぬわはははは」

頼むぜ本当に。俺は、人生で初めてになるかもしれない神頼みを、心の中でしておい
た。

01 第一章1

世界最大の大陸ダイロクス。この広大な土地には世界の生物の約九割が生息していると言われている。大陸は気候の特徴から大きく四つの地域に分けられている。

大陸北東部。寒冷な気候で、時期によつては積雪なども観測されるノストル地方。その地域の大半が常に濃霧で覆われており、龍人族が住むと言われる『歩く山』が存在する。モンスターの頂点に君臨する上位種族である多種多様なドラゴンや、それらと繩張り争いが可能な程の強力なモンスターが生息している危険地域である。

大陸南東部。比較的温暖な気候で、大半を平地が占め、生息するモンスターも低位のものが多いためサスクワ地方。モンスターや自然災害の観点からすると大陸中で最も安全な地域であり、様々な人種が生活するが、日々世界最大の国土面積を誇るダムディリアス帝国の侵略行為が行われている。帝国に反抗的な国にとつては必ずしも安全とは言えない戦争の絶えない地域である。

大陸南西部。灼熱大陸とも言われるほど高い気温が特徴で、巨大な湖や火山地帯、海底洞窟など自然による造形の起伏が激しいカグラツト地方。蛇頭人族や獸人族などの一部の環境に適応した人種が営む小国家が乱立している。基本的に他国とは非干渉的

で各国ごとに自己完結しており、争いは少ないという話である。

大陸北東部。分単位で気候が激しく変化し、その多くが謎に包まれているバグリ地方。様々な国が調査団を派遣しているが、強力なモンスターの群れや自然の猛威に阻まれ有用な成果はあがつていらない。数千年前にサスクワ地方に移住するまでは、天上人族が最北端にある巨大な遺跡内に身を潜めて住んでいたとのことだが、現在は国家レベルの文明は存在していないと言われている。

その内のサスクワ地方。マーリーの第式級魔術により自らの体を『暗黒の霧』と化した俺は、ダムディリアス帝国が誇る帝都第参監獄から無事に脱獄を果たし、ぼつぼつと明かりの灯る平民層が暮らす居住区の上空をふわふわと遊泳していた。牢獄の方は、とても騒がしい。何事かと周囲の居住地から住民がいくらか顔を出している。

「小僧。見えるか。わしは、この光景がとても好きじや」

霧化したままの状態で器用に俺に話しかけるマーリー。視線は直下の居住地に向かっていた。一体どこから声を出しているのだろうか。魔術ってすごい。

《ああ、見えてるよ》

俺は、そんなことよりも追手とかの方が心配で仕方ないのだが。

「なぜだか分かるか。ん？」

《どうせ、鼠のような下等種族を遥か高みから見下せるからとかそんなところだろう》

「ほう。正解じや。お主の下等な脳で、よく分かつたのう。感心したぞ。今わしがたっぷりと時間をかけて攻撃魔術の魔術陣の形成を始めたとしても、奴らは無様に逃げ回ることしかできないのだろうと考えるだけで、ぬふふふ」

霧化していなければ、マーリーはここでじゆるりと舌なめずりをしただろう。それくらいゲスい笑い声だつた。

『絶対にするなよ。そんなこと』

一応、牽制をしておいた。まつたくこいつは、本当にいかれている。人間を一体何だと思っているのか。いや、自分よりも劣位種族は人間とも思っていないのか。いつまでこの奇妙なボディシェアが続くかは検討もつかないが、意識改革は必ず必要だろう。このままでは悪名ばかりが広まってしまう。

『そういえばマーリー』

俺は、聞こうと思っていたが不遇な出来事の連続で聞き忘れていた疑問をふと思い出した。

「ん。何じや」

『お前はどうして、あんな場所に閉じ込められていたんだ』

それは数時間前、俺とマーリーが出会った時のこと。奇跡的で華々しい運命なんかではなく災厄的で混沌とした最悪の呪い。俺の後悔の元凶となつた瞬間の出来事であつ

た。

だが、それを語る前に、まずは俺が帝国の敷地へ入国する数日前まで話を遡る必要がある。

ダムデイリアス帝国を中心に広がる広大なダムディング大平原内の、帝国へ続く舗装された道を俺は歩いていた。道幅は八メートル程で対向する旅商人の荷馬車が余裕ですれ違える程度には広い。商人や旅人、傭兵や帝国の兵士など多種多様な職業、様々な種族の人間が行き来していた。帝国方面へ向かう人数は逆方向へ向かうそれとほぼ同じくらいだろう。ダムディング大平原は人工的に整備された土地で、元々辺り一帯は森林地帯であった。モンスターの駆除と、配下の国との貿易の効率化を目的に数千年前から整備が始まり、今では半径三百キロメートルもの森林が消滅した。舗装された道を外れれば、膝丈の長さに切り揃えられた植物がお行儀よく整列している。平原を横切る大河の周辺や、かつての大陸大地震でできた亀裂など、部分的にかなりの高低差がある場所も存在するが、基本的には平坦な土地であつた。平原の各地には小から中規模の中継地点としての街が発展しており、宿泊業や商業などで賑わいを見せていた。

俺は、二週間前に約三ヶ月程度滞在していた村を離れてから今日まで、そういった街

を何か所か経由してきた。本当は、あと半年くらいはそこに身を置く予定であったのだが、住人に俺の手癖の悪さが露見しそうになつたのでそそくさと村を後にした。どの土地でも、人族である俺に仕事を提供してくれるようなもの好きなどおらず、稼ぎもなく年中金欠であるため、各地の村を渡り歩き必要最低限の盗みをして、バレそうになつたら姿をくらますという一連のサイクルを繰り返しながら生きてきた。誇れるほどのことでもないが、純粹な腕っぷしでは敵わないにしろサバイバルとスリの腕前は他の種族に決して引けをとらないだろう。もちろん、経由した中継都市でも幾何かの稼ぎを頂いておいた。

そんな俺の次なる標的は、世界最大の侵略国家ダムディリアス帝国。やはり夢は大きく、志は高く。という訳にはいかない。生きるためにには目の前の現実を的確に捉えることのできる観察眼と判断力の方が必要だ。手堅く、謙虚にこつこつと、自分にあつた目標を立てて無理をせずに生きていく。それが俺のモットーである。帝国方面へ向かっているのは、俺の顔が割れていらない未開拓の村を探すためだ。俺が歩むこの道は、帝国の近くまで進むとその巨大な外壁の周囲を囲むように整備されており、そこから東西南北、様々な方角へ分かれ道が繋がつている。俺の真の標的は、帝国を超えた先のまだ整備されていない森の奥にある小規模な集落、スンカル村であつた。いくつか前に滞在していた別の村で、旅の商人からスンカル村の情報を聞き、ずっと目星をつけていたのだ。

人口の割に土地が広く、森の中であるため身を隠す場所も多いので、しばらくはそこで生活できるだろう。そこを拠点に、周囲の村を転々としながら、ゆっくりと今後の方針でも決めるしよう。俺は、新天地への期待を胸に意気揚々と歩を進めた。空は快晴で気分も良い。中継都市での収穫も上々で懐も暖かい。今のところ、トラブルもなくする順調だつた。好運気を乗せた追い風が吹いている。そんな感覚だつた。

だが、そういう時に限つて必ずと言つて良いほどに何かが起つた。そしてそれは基本的に悪い方向へと転がつていくことを、俺は知つていた。これまでの経験上、お決まりの展開だ。数週間モンスターと出くわすことなく安全に探索をしていたら、足を滑らせてウルフの群れの住む洞窟に転げ落ちたり、貴重な植物を無傷で大量に採取できたと思つたら、その日に限つて盗賊につかまつたり、思い返せばきりがない。

現に、十数メートル進んだ先にその種と思われるきつかけが転がつていた。

「誰か、助けてください。お願ひします。ママが。死んじやう。誰か」

道の真ん中で必死に懇願する幼い少女は猫人族のようだつた。頭にちよこんと位置する小さな二つのとんがつた耳と、両頬に三本ずつ生えた細い髭、尖つた爪、間違いないだろう。猫人族だ。

「誰か。助けて。助けてください」

少女は、とても貧相な格好をしていた。着用している服はひどくぼろぼろで、服とい

うよりも布と言う方が正しいのではないだろうか。体中が泥などで汚れており、しばらく水浴びもしていないのだろう。髪もぼさぼさで全く整えられていない。おそらく、奴隸として主人に使われていたが耐えられなくなつて逃げ出したか、帝国の貧民層での暮らしに我慢できなくなつて新たな居住地を求めて出国したか、そういうふたところだろう。

「お願ひします。お礼はします。何でもしますから」

だが、少女の願いを聞き入れてくれるようなお人好しはいないようだつた。それもそ
うだ。表面上は平和で活気あふれる帝国周辺の地域といえども、現実は他国との戦争の
真只中だ。いつ何が起こるかなんて誰も予想がつかないし、自分達の生活だけで精一杯
で誰かを助ける余裕などない。道を歩む人々のほとんどは目を伏せ、視線を外し申し訳
なさそうに通り過ぎていく。中には醜穢なものでも見るよう目に目を細めて、わざと距離
を置くようにして横切る者もいた。巡回の兵士でさえ見てみぬふりだ。救いのない残
酷な世界だ。猫人族の少女も改めて実感しているところだろう。

人々が、冷たい理由はもう一つあつた。いや、どちらかというとこれが最大の理由か
かもしれない。目の前の猫人族は『人種ツリー』において下位種族である第七階層に位置
する種族なのだ。助けたところで見返りは期待できない。なら、関わらないほうが賢明
だ。当然の考えだろう。

『人種ツリー』。正式名称、『人種別種族優位性配置表』と呼ばれる絶対的な世界の基準。人間を種族ごとに第壹階層から第八階層までに分類分けしたもので、第壹階層がもつとも種族的に優れ、数字が大きくなるにつれて劣っている、劣位種族であるとする狂気の沙汰とも言える恐ろしい定めごとである。さらに、第壹階層から第参階層までが上位種族、第肆階層から第六階層までが中位種族、第七階層及び第八階層が下位種族とされており、ほとんどの国において身分や地位はこの三つの大分類に従つて決定されている。重要な役職や貴族には上位種族、平民が中位種族、奴隸や貧民が下位種族。世界の常識だ。そして、俺は何を隠そう世界最弱最底辺の劣等種族、人種ツリー最下層である第八階層に位置する人族である。

お互に大変だな。そう心の中でねぎらつて少女の隣を通り過ぎようとする。

「お願ひします。ママが。誰か、助けて」

見捨てるに対する罪悪感か、周りの雜音がやけに小さく聞こえ、少女の声だけが誇張して耳に入つてくる。声をかけたところで俺に何ができる。心と時間に余裕がある他の誰かが、きっと彼女を救つてくれるだろう。でも、その誰かが現れなかつたら。いや、そもそも少女が泣き叫ぶほどの内容のアクシデントではないかもしない。一緒に歩いていた母が転んで膝を擦りむいたとか、少し横になつていれば治るような風邪を引いたとか。その程度のことであれば、わざわざ助ける必要もないだろう。もしかした

ら、盗賊の罠という線も考えられなくもない。幼く可哀想な猫人族の少女を使って心優しい獲物をおびき寄せ、金品を略奪するつもりかもしれない。それなら、助けなくとも正解だ。

そこまで無駄にあれこれと考察して、俺は「はあ。」とため息をついた。それと同時に足を止める。

どのパターンも、まずないだろう。モンスターも生息しておらず、見晴らしも良いこの平原で、あれほど必死になるような出来事なのだ。なにか不測の事態に違いない。盗賊の件も、こんな非情な世界でわざわざそんな費用対効果の低いやり方をするわけがない。それに、もし帝国の兵士なんかが釣れてしまつたら大変だ。いろいろと思考を巡らせては見たものの、最初から答えは出ていた。なあ兄貴。あんたなら、見返りとか考えずにまず手を差し伸べるんだろう。困っている人を助けるのに理由は必要ない。あんた、いつも言つてたもんな。

どこにいるかも、そもそもまだ生きているのかさえ分からぬ兄貴のことを思い出す。何かを選択するときは、今まで兄貴を参考にしてきた。兄貴ならどうするか。どう解決するのか。いつも基準にしてきた。そのおかげで、随分と生きづらい性格になってしまったのだが。

「俺になにか手伝えるかい」

猫人族の少女の顔を覗き込む。

「え？」

少女は、目をまん丸にしていた。相当驚いたのだろう。無理もない。俺はできる限りの笑顔を作つて少女の手を取る。

「安心しろ。俺がなんとかしてやる。絶対に助けてやる」

「あの、えっと。ありがとうございます」

少女は少し安堵したように見えた。しかし、表情からはまだ焦燥感が拭えない。「とりあえず、お母さんがどんな状況か教えてくれるか」

俺は、少女が焦らないように、できる限り優しくゆっくりとした口調で訪ねた。
「ママが、突然動けなくなつて、うまくしゃべれなくなつて、えっとそれで」
動けなくなつた?
衰弱によるものか。それとも。

「返事はしてくれんだけど聞きとれなくて。震えてるし、苦しそうだし。後は、えっと」

少女はひどく混乱しているようで、上手く状況がまとめきれていないうようであつた。母親が突然倒れて動けなくなつた。症状は体の震えと言語機能の低下。他にもいろいろと話していくが、要約するとこんなところだろう。

「それで、肝心のお母さんはどこにいるんだ」

「向こうの、崖の下」

少女は、さらさらと風により揺れる背の低い植物が生い茂る平原の先を指さした。そういうえば、この近くには大陸地震の際の巨大な亀裂が残っていたはずだ。少女の言う崖というのはそこのこと是指すのだろう。

「とりあえず、行くか」

俺は少女を引き連れて、舗装された道を外れ少女の身長くらいはある植物をかき分けながら進んでいった。少女の母の症状。この地域での出来事であるならば、思い当たる節が一つだけあつた。そして、それを解決する方法も。

そこから二十分程度歩いたところで俺は、ふとまだ少女に名前さえ聞いていなかつたことに気付いた。歩みは止めずに、草むらに足を踏み入れた頃から静かについていていた少女の方を振り向く。

「俺はリオン。お前、名前はあるのか」

「えっと、あります。ミンユ、です」

「ミンユか。お母さんの名前は」

「カンユ、です」

ミンユとカンユ。低位種族で名前持ちということは、元奴隸ではない可能性が高い。わざわざ低位種族の奴隸に名前を付けるような主人はほとんどいない。

「帝国から抜け出してきたのか」

「・・・はい」

なるほど。ご明察。

「それで、どうしてこんな道の外れを進んでいたんだ」
「・・・」

少女は、うつむき、無言で繋いだ手に力をこめる。何か悲しい出来事でもあつたのだろう。見下ろした少女の姿からはそんな雰囲気が感じ取れた。
「話したくなれば無理に話さなくともいいぞ」

だいたいの予想はつく。帝国の貧困層の生活はとても酷いとよく耳にする。直接見たわけではないが、聞く話だけでも、俺なんかが到底耐えられるものではなかつた。

ちなみに、帝国には三つの入り口が存在する。通常使用する巨大な門が北と南に一つずつ、これは直接平民層へ繋がつてゐる。そしてもう一つが帝国内部からしか決して開けることのできない、一メートル程度の高さの小さな扉で、貧困層と繋がつてゐる。外からは高位の魔術により扉の姿は視認できないようになつてゐるが、平原の亀裂を辿つた付近に存在するらしい。いつだつたか、帝国の貧困層から抜け出してきたというエルフの男に教えてもらつた。『一方通行の出口』とも呼ばれ、平民層への侵入が許されていない貧困層の住人が帝国の外へ出るための唯一の手段であるが、一度その扉をくぐつたら最後、二度と入国することは許されず、事実上の『追放処分』を意味する。帝国の人

口の半数以上を占める貧民達を労力をかけずに減らす戦略の一つだ。

状況から察すると、この猫人族の親子もその扉をくぐつたのだろう。それが正しい判断だつたのか、そうではなかつたのか。今の俺にはよく分からないが。

「あの、この辺、です」

「お。 そうか」

ミンユが、俺の手を軽くくいと引っ張る。俺は、歩く速度を少し緩め目をこらす。すると、数メートル先に植物の整列が途切れている箇所が見えた。俺は、その境界線の手前まで進んでから、足を止めた。

大陸大地震により生じた長さ数キロメートルに及ぶ巨大な大地の亀裂。見た感じ幅は約百メートル。深さはだいたい五十メートルくらいだろう。真昼間でなおかつ快晴であるため、底まで視認することが出来た。この長い長い大地の割れ目はまつすぐに帝国へと続いていた。まるで、帝国を半分に分断しようとしたかのようにまつすぐと。

「ママ！」

ミンユがひときわ大きな声をあげた。その目線の先、俺がたどり着いた場所より東側に数十メートル進んだ所の亀裂の底にミンユの母親と思わしき人物がうずくまつていた。人族である俺の視力ではほとんど点にしか見えず、人間であることくらいしか確認できなかつたが、ミンユが言うのだから間違いないのだろう。まだ、消滅していないと

「うことは死んではいないようだ。

「それじゃあ、ひとまず」

俺は、眼下に横たわる遠い地面を見て、ふうっと息を吐いた。これを降りるのか。考えただけで冷や汗が滲み出してきた。亀裂の側面は、地面に対して垂直という訳ではない。底からある程度の角度がついた斜面状になつており、ところどころ岩盤が突起しているため、それを足場にすれば降りるのは不可能ではないだろう。とはいっても、かなりの急斜面だ。降りられたとしても同じ経路を使って登ることは難しそうだ。まあ、降りる際にたどえ足を滑らせたとしても、転げ落ちるだけで怪我はするだろうが死にはしない。多分。おそらく。大丈夫だ、俺よ。これくらいでは死はない。

俺は、そう自分に言い聞かせ、危ないからお前はここで待つていろとミンユに指示するために口を開く。

「あぶつ」

だが、俺の言葉を聞くよりも早くミンユはすでに斜面を降り始めていた。手足の鋭い爪をストッパーの様にして器用に使い落下するのを防ぎ、猫人族特有の柔軟性と跳躍能力で岩から岩へと飛び移っている。

「・・・」

俺は、虚しく空中を彷徨つた言霊を飲み込んで、「よし。俺も行くぞ。俺ならできる。」

と、自らを鼓舞してから、おずおずと亀裂の淵に手をかけた。

「ぎょわあああああああああああ。おうふ」

世界が大回転をかましていた。その数秒後に訪れる衝撃。激しい痛みが走り、それと同時に世界は元に戻つたようだつた。

「あの、大丈夫ですか」

俺よりも一足先に亀裂の底にたどり着き、母親の安否の確認まで済ませたミンユが俺の顔を覗き込んでいた。

「ああ、問題ない」

俺は、何事もなかつたかのようにふるまつて見せた。何事もなかつたかのように立ち上がり、何事もなかつたかのように数メートル先でうすくまるミンユの母親の元に歩み寄る。ミンユは、心配そうに俺を眺めていた。まあ、心配されるのは嫌ではないが、そこは察してくれよ。男として、こう、譲れないものというか、なんというか。あるだろ。おそらく、今俺の顔は俺の人生史上ベストスリーにランクインする程度には赤くなつていることだろう。

順調とは言わないにしろ、着実に亀裂をくだつていたのだが、最後の数メートルで調

子に乗つて、「あと少しでそつちにつく。安心しろ。今俺が助けてやるからな。」と、突起を掴んでいた右手を離し、下で心配そうに俺の到着を待つミンユに向けて、親指を立ててかつこよくポーズを取ろうとしたのが間違いだつた。放した右手は想定した位置につくことなく、そのまま俺はバランスを崩して転げ落ちた。もともと脆弱な人族だ。何ともないわけがない。めちゃくちや痛い。体はこの数秒間で擦り傷と打撲だらけになつたのだろう。数日間は寝返りをうつのにも苦労しそうだ。恥ずかしさと相まって凄く泣きたい。

「あの、治せ、ますか」

少女の母親、カンユのすぐ横に片膝をつき症状を確かめる俺を見て、ミンユが訪ねる。俺は「ああ。多分な」と、頷き、カンユをゆっくりと仰向けに寝かせた。

「おい。話せるか。手足はどうくらい動かせる」

俺は、カンユの肩をトントントンと叩きながら話しかけた。カンユは、俺の問い合わせに応えるようにぼそぼそと何かをしゃべり指先を少しだけ動かした。麻痺は現在も継続しているようだ。呼吸はできているし、体が硬直しているわけでもない。顔色も悪くはない。そして俺は、カンユの手首を握り、数秒数える。

「脈も正常か」

ゆっくりとカンユの手首から手を離し、頭の中で一度症状を整理してからミンユの方

を振り向いた。

「お前のお母さん、ここに生えている草は口にしたのか」

「え？」

ミンユは、突然の問いかけに一瞬戸惑つたようだつたが、すぐにこくんと頷いた。

「そうか」

俺は、それを聞くと背負つていた鞄を自分の前に下ろし蓋を開けた。そこから、革製の袋を取り出す。

「あの、それは」

「カイオウ草だ。この辺では見ない植物かもな。基本的にはウルフ草が生えるような森の奥の方に群生している。様々な状態異常に対する治療効果がある。効用はそんなに強くないし即効性はないから、万能ではないが、この程度の症状なら三十分もすれば良くなるだろう」

俺は、袋から何枚かのカイオウ草を取り出し、カンユの口に押し込む。

「ゆっくりで良いからよく噛んで飲み込め。すぐに良くなるぞ」

カンユは、俺の言つたとおりに麻痺した口を一生懸命に動かしてカイオウ草を噛みしめる。五分程度かけてそれを食べると、瞳だけを俺に向けて何かをしゃべつた。きっと、ありがとうとか、そういう感じの言葉だろう。

それから數十分間、ミンユはじつとカンユの顔を見つめぎゅっとその右手を握りしめていた。ときたま、「ママ」と、小さな声で囁きながら。素晴らしい親子愛だ。俺は、胸の奥がジーンっと熱くなるのを感じた。

そして、「ミン、ユ」

カンユが掠れた声でミンユの名を呼んだ。

「ママ」

ミンユは、飛びつくようにカンユの顔を覗き込んだ。

「ありがと、ね。心配、させて、ごめんね」

「ママ。ママ。良かつたあ」

ミンユの瞳からは自然と大粒の涙が溢れだしていた。カンユは、その涙を空いた左手でゆつくりとぬぐい取り、ミンユの頭を撫でる。

「ママあー」

相当心配していたのだろう。安心したミンユは、嗚咽を漏らしながら泣きはじめた。

「どなたかは、存じ上げ、ませんが、助けて、くださり本当に、ありがとう、ござい、ました」

カンユはゆつくりと上体を起こし、ミンユを抱きしめると、俺の方を見て深々と頭を下げた。

「いやあ。まあ、気にしないでくれよ。たまたま通りかかって、たまたま気分が向いたから、たまたま手助けしただけのことだ」

俺は、少し照れた。純粹な好意を向けられたのはかなり久しぶりだつた。

「まあ、俺のことは気にしないでくれ」

そういうつて、俺はくるりと二人に背を向けると、わざとらしく「そういえば、あれどこにやつたかな」と、鞄の中をまさぐるふりを始めた。

「本当に、ありが、とう。心から、感謝、します」

カンユのその言葉を気にした様子もなく、背中で聞き流す。本当に俺は、照れ隠しが下手くそだなど実感した。顔が不自然ににやけているのが自分でも分かつた。

それから数分経過して、カンユの状態異常は完全に回復した。体も不自由なく動かせるようになり、後遺症もなさそうだ。回復したカンユは、これでもかと俺に感謝の言葉を投げかけ、ぜひ恩返しをしたいと申し出た。大したことはしていないと一度は断つたが、「こんな世界で貴方の様に優しい方は知りません。本当でしたら、末端の猫人族と言えども誇りと忠義に重きを置く獣人族として生涯を賭して、恩人である貴方に忠誠を誓うところなのですが、幼い娘もおりそれもできないのです。せめて、なにか一つだけでこの恩に報わせてください。お願ひします。」とのことだったので、頑張つて降りてきた断崖絶壁を見上げた後に、それではと帝国近辺までの道案内をお願いした。猫人族で

あれば、この程度の斜面を登るのは難しくはないだろうが、俺には無理だ。というか、さつき転げ落ちたのがトラウマで登ろうと考えただけで足が竦む。

あいにく、この亀裂は帝国のすぐ近くまで続いており、この親子はそちら側から来たのだから道案内を頼むのは不合理ではない。まあ、一本道なのだから迷いようがないのだが、とりあえず即席で思いつくお願ひとしたら、それくらいしかなかつた。大事なのは、内容ではなくきちんと恩に報いたという事実なのだ。それに、一人で旅をしていると話し相手が欲しくなるものだ。帝国までの数日間、退屈せずに過ごせる。それだけでも充分ありがたい。

「ところで、リオン様」

「様付けはやめてくれ。主人ではないんだから、恥ずかしすぎる」

「それでも、貴方は恩人なのですよ」

「ああー、じゃあ、様付けをしないのも恩返しだ。俺の居心地が悪くなるから」

「そうですか。では、リオンさんと、お呼びしてもよろしいでしょうか」

「ああ、好きにしてくれ」

カンユは、相当忠義というものを大切にしているのだろう。その言動一つ一つに俺への配慮が汲み取れた。ミンユは、その間もカンユの腕にぎゅうっとしがみついていた。母親が好きで仕方ない様子だ。

「あの、お話の続きなのですが、どうしてあのような症状が現れたのでしょうか」

「ああ。そういえば説明していなかつたな」

俺は、後から説明してやろうと思っていたが、恩云々のくだりですっかり忘れていた例の件を思い出した。

「帝国から抜け出すとき、食料は持つて出なかつたのか」

「いえ、少量ですが持ち出しております。この子用にと、今も大事に保管しています」

そういうて、カンユはミンユの頭を優しく撫でる。

「お前は、その食料は食べないのか」

「はい。貴重なものですから。私は、この平原一帯に生えているクプル草を頂きました。栄養価は低いですが、お腹は膨れますので」

「そうか。やっぱしな」

「どういったことでしょうか」

「この辺一帯にモンスターが全く生息していないのはなぜだと思う」

「ええつと、帝国の警備兵が巡回をしているから、でしょうか」

「全然違う。これだけ広い平原を巡回兵だけで見回るのは不可能だ。かといって、強力な魔術でモンスターが侵入できないような結界を張り続けるほど大切な土地でもない」
俺は、足元に生えている丈の短いクプル草を抜き、じいつと眺める。

「答えは、食料が無いからだ」

「え。食料ならこんなに沢山」

カンユは、俺の言うことが信じられないようだつた。クブル草の特徴は全国的に知られているものかと思っていたが、帝国から出ずに貧困層で生きてきたのなら知らないくても無理はないのか。

「知つての通りクブル草は大陸全土に群生している食用の植物だ。成長したものは約二メートルほどになり、食材として流通しているのはこの成長した状態のものだ。だけど、未成熟のクブル草は成長の過程で内部に麻痺性の分泌液を生成する。この分泌液は、摂取した生物の体の自由を奪い、俺達みたいな低位種族であれば、回復するまでに少なくとも丸一日はかかる。おまけに、熱にも強いから調理にも向いていない」

「そうだったのですか。知りませんでした。リオンさんは、とても博識なのですね。尊敬します」

「お、おお」

カンユはとてもいい反応をしてくれる。だが、それにいちいち俺は照れてしまう。あまり褒められることへの耐性がないのだから、どうかやめてくれ。

「そして、平原一帯のクブル草には帝国の魔術師から成長を抑制する魔術がかけられている。食用になる前の未成熟の状態で成長を止めるんだ。クブル草は他の植物から養

分を吸い取つてしまふから、周辺には他の植物も生えてこない。帝国にとつては低コストでモンスター除けができる良いツールなんだろうな」

そこまで言つて、ちらりとカンユの方を見る。

「はあ。なんて素晴らしい御方なのでしょう」

カンユの眼差しは、俺への尊敬で充足していた。

「うぐう」

思わず、変な声が出てしまう。

「まあ、つまりはこの世界で俺たちが生きていくためには、こういつた知識をたくさん身に付けていくことが必要だつてことだ」

「はい」

俺は、これ以上純粹無垢な好意に晒されたら、太陽に照らされたヴァンパイアのように灰になつてしまいそうだつたため、早々に話を切り上げることにした。

「まあ、サバイバルの知識は目的につくまでに沢山教えてやるから。しつかり活用してくれ」

「はい。感謝します」

「それでは、そろそろ向かおつ!!」

逃げるようすに、カンユから顔を背け、帝国へと続く自然の道を進もうとしたその瞬間

だつた。気恥ずかしさにより、変な笑顔をしたままの俺のすぐ目の前にもの凄い勢いで『何か』が横切つた。そして、どこおおおんという爆音とともに亀裂の側面に激突する。

「うぎやああ」

俺は、我ながら間抜けな悲鳴を上げつつ衝撃で二、三メートル後方へ吹き飛んだ。
そして、

「おうふ」

顔面から地面に衝突し本日二度目の、『おうふ』をあげる。

「何なんだよ。一体」

俺は、がばっと顔をあげ何かが落下した地点を凝視した。土煙がもくもくと立ち込め、良く見えない。ミンユとカンユは既に臨戦態勢で、四つん這いの体勢で毛を逆立て「ふううつ」と、獣人族特有の威嚇音を発していた。なんとも頼もしい姿である。いくら下位種族であると言つても獣人族の一種だ。戦闘能力は人族の俺よりもはるかに高い。

次第に、土煙がはれていきむくりと『何か』が蠢く。シルエットはそんなに大きくな
い。だが、生き物であることは間違ひなさそうだ。後は、敵意があるのかないのか。
数秒の沈黙。流れる緊張感。

最初に口を開いたのはカンユであつた。

「嘘、でしょ。どうしてこんなところに」

その声には明らかに恐怖の感情が混ざっていた。続いて、ミンユがその正体に気付きビクンと体を震わせる。二人とも、遠目から見ても分かる程に怯えきっていた。がたがたと足が震え、すでに戦意喪失しているようだつた。

一体どういうことだ。いくら自分達より優位種族と対峙したのだとしてもこの怯え方は異様だ。絶対的な死でも覚悟したかのように、すでにひどく疲労しているように見えた。

そして、土煙に身を包んだままその『何か』が口を開いた。

「我的目前に立つことを、誰が許可したのだ。下等種族よ。ひれ伏し、命乞いをすることさえも愚昧な行為だというのに、偉大なる我の前に立ちはだかり、さらに闘争の意を表すか」

「子供?」

俺はその正体に気付いてないためか、危機感よりも物々しい言葉に不釣り合いなその甲高い声の方に気を取られた。それとは対照的にミンユ達は完全に委縮してしまつたようだ。荒い息を吐き、今にも膝をついてしまいそうだ。

「相当、死に恋焦がれているようだな。我的見立てでは死も貴様たちを好いているようだぞ。良かつたではないか。その恋は一方通行ではないようだ。安心しろ。すぐに望

み通り、貴様たちに死を与えてやろう」

『何か』は、少しづつ声に淒みをかけ感情を上乗せしていく。まるで演劇のクライマックスのシーンで最後の決め台詞に向かい、会場の空気を盛り上げる主人公のように。「おっと、忘れていた。貴様らの人生の最後に我の名だけ教えておいてやろう。自分たちの無価値な命に終焉を与える偉大な者の名だ」

何度も練習したかのようにすらすらと流れるように紡ぎだされる言霊。ミンユ達は完全に場の雰囲気に飲み込まれてしまっているようであった。俺は、妙に可愛らしい声が気になつて、いまいち気持ちが動かされない。

「貴様たちは名乗る必要はない。我は足元に生える雑草の名を一つ一つ覚えるほど、醉狂な趣味は持ち合わせてはいないのでな。それでは、そろそろ永く退屈な前口上は終わりにしよう。終幕だ」

「ごくりっとミンユ達が生睡を飲む音が聞こえた気がした。

「私は、偉大なる世界の支配者。全種族の頂点にして最古のドラゴンの血を引く高貴なる存在。人種ツリー第壹階層に位置する最強の名を冠する崇高なる古代龍人族にして、全てを喰らいし者」

『何か』は、ここだと言わんばかり声を張り上げる。さすがの俺でも、びりびりと空気が震えるのを感じた。圧倒的な力。ここにきて、はじめて俺は恐怖を感じた。それと同

時に、胸の奥からぐずりぐずりと込み上げてくるような『死』の感覚。こいつは、相当やばい。本能がそう告げていた。

「我が名は、」

めいいっぱいの溜めをつくる『何か』。そして、ぱつと土煙がはれる瞬間にあわせて名乗りをあげる。

「ペネパロ！」

ペネパロ！

俺は、思わず心の中で復唱してしまった。どんな大層な名前が出てくるかと身構えていたのだが、なんとも締まらない。別に他人の名前を笑うほど、卑屈な性格はしていないつもりだが、ここでそうくるか。

しかし、ミニユ達は「ひい」と、声にならない悲鳴をあげて、ついに我慢の限界に達したのか一目散に逃げだしてしまった。トップスピードで亀裂の斜面を登り、あつとう間に見えなくなってしまった。俺を置いて。

「えーと、恩とか忠義のくだりはどうなったの」

一人取り残された俺はぼつりと呟き、二人が消えた空と岩の境界を眺めた。

「ペネパロの偉大きさに恐れおののいて、逃げ出したか」

ペネパロと名乗った『何か』は、本人が語るように龍人族の少女のようであつた。身

長は低く、百四センチメートルくらいだろうか。白銀色の綺麗な短髪で、華奢な身体つきをしており、肌は透き通るように白い。瞳は、龍人族特有の燃えるような深紅で、頬や腕など部分的に龍鱗で覆われている。背中からは身長と同じくらいのサイズの立派な羽根、臀部からは細く長い尻尾。どちらも綺麗な純白だつた。口元からは鋭い牙がちよこんと顔をのぞかせていた。ペネパロは、俺の存在にはまだ気づいていないようで独り言をぶつぶつと呟いていた。

いつの間にか、一人称も我からペネパロになつていて。

「名を名乗るときは、もう少し溜めても良かつたかも知れない。とりあえず、おとうの真似をしてみたけど、次はペネパロのオリジナルも混ぜてみよう。それがいい。きっとその方がかつこいい」

先ほどの長い名乗り文句の反省をしているようだつた。凄い向上心だ。俺は、このままだこかに飛んでいくつてくれないかと淡い希望を抱きながら、息を潜める。だが、今日の俺はとことんついていないようで、その数秒後にペネパロとばつちり目が合つた。

「お前、いつからそこに」

ペネパロは俺の存在に気付くとすぐに戦闘体勢をとつた。

やばい。死んだかもしれない。俺の脳内で警報が鳴り響く。もし、こいつが本当に古代龍人族であったなら、俺に勝ち目は微塵もないだろう。逃げ切れる可能性も零に等し

い。

龍人種族は、大きく分けて三つの種族に分けられておりそのどれもがもれなく上位種族だ。純粹にドラゴンの能力を持ち第参階層に位置する龍人族、その中でも高位の戦闘力を誇る精銳部族で第弐階層に位置する龍王族、そして始祖のドラゴンの血を引き人種ツリー中で唯一、最高峰の第壹階層に位置する古代龍人族。龍人種族は、ノストル地方に存在する『歩く山』に国を構えており、通常の個体はそこで生涯を過ごすため、他種族でその姿を見る者はほとんどいない。ましてやこんな他種族がわんさかいる場所に現れるような存在ではない。かつて龍人種族の長であるマグナルが種族を纏めるまでは、群れることを嫌い各個体が自由気ままに大陸全土を闊歩していたらしく、気まぐれで他種族が収める国を滅ぼしてみたり、自身が住処として定めた周辺の生物を全滅させたりとかなり恐ろしい悪行を各地で行っていたため、それが歴史となつて語り継がれ、現在も他種族からは畏怖の象徴とされている。普通に生活していたらまず出会うことのないような、大陸の覇者。たとえ子供であつたとしても、その何気ない一撫でで、俺の体なんて木つ端みじんに四散してしまうだろう。

「ええっと、ずっといたんだが」

俺は、慎重に言葉を選んでなるべく刺激せずにこの場をやり過ごすことに決めた。上手くいけばだが。

「なんだと。貴様。気配を消していたとか。ペネパ、いや、我としたことが、全く氣付かなかつたぞ。なかなか見所があるな」

ペネパロは、思い出したように声色を作り、表情もきりつと引き締める。

「いや、それほどでもないさ」

そして、流れる沈黙。

ペネパロは口元をもごもごと動かし、何かしやべろうとしているようだが、なかなか音として形成されない。その瞳には明らかに動搖の色が映っていた。

まさか、こいつ、次のセリフが思いつかないのか。あまりにも不自然に続く沈黙に俺はついに耐え切れなくなつていた。

「えつと、どうしてこんなところに」

俺は、おそるおそる話題を提供してみる。ペネパロの表情が一瞬ぱあつと明るくなり、すぐに真剣な顔に戻る。

「なぜここに。だと。下等種族の分際で我に質問をすることは良い度胸だな。ますます気に入つたぞ。普通なら、不敬を働いた貴様をこの場で殺してやるところだが、今回は大目に見て、えつと、その、お前の質問に答えてやろう。そして、えつと、我に感謝する」と良い。ん、違うか。偉大なる我の懐の深さに敬意を示すが良い。の方がかつこいいか。そうだな。我がここにいる理由はしごく簡単だ。愚かな下等種族に、我の偉大さを

分からせる、じやなくて、恐怖を植え付ける。いや、我の偉大さを、こう、あの

言葉のチョイスがいまいちだつたらしく口ゞもるペネパロ。

「認識？理解？知らしめる？」

俺は、そつと助け舟を出してみた。

「そうだ。我の偉大さを知らしめるためだ」

そして、どやつとした表情で俺の方を見る。そのまっすぐな瞳は紛れもなく物語つていた。俺に粹な話題を提供しようと。早く次の話題をよこせと。俺は恐怖とは明らかに別の感情、期待に対する重圧により冷や汗をかいだ。どうやつたら、このやりとりが終わるのかと、そのことばかりを考え始めてしまう。

「それは、恐ろしい。どうすればこの命を見逃していただけますか」
わざとらしく、命乞いをしてみる。

「貴様、よもや我と対峙しておいて生きて帰れると思っているのか。どれだけ愚かなのだ。えつと、その、命知らずにも程が、ん。これはここじゃないな」

「ああ、めんどくさい。もうすでに、俺の中からペネパロへの恐怖は完全に消えてしまつっていた。」

そこで、俺はある秘策を思いついた。多分、これでなんとかできるだろう。

「だが、仕方ない」

小声で、先ほどと同じように助け船を出す優しい俺。

「だが、仕方ない」

ペネパロは、俺のファインプレーに味を占めたのか、何も疑うことなく一言一句同じ言葉を復唱した。

「今日は気分が良いから」

続ける俺。

「今日は気分が良いから」

復唱するペネパロ。

「貴様のこととは見逃してやろう」

「貴様のこととは見逃してやろう」

「我的気分が変わる前に」

「我的気分が変わる前に」

「どこぞへと消え失せるが良い」

「どこぞへと消え失せるが良い」

「はい。なんと慈悲深き御方。感謝いたします。それでは」

俺は、満面の笑顔でそう告げると、踵を返してその場を去ろうとした。だが、そう上手くはいかなかつた。

「おい待て貴様」

「数歩進んだ所で、すぐに引き留められた。くそ。いけると思つたのに。

「貴様、ペネパ口を嵌めたな」

「一人称」

「俺は、振り返りざまに指摘する。

「くつ」

ペネパ口は、白い頬を少し赤らめる。

「貴様、策士だな。我的紡ぐ言葉を巧みに操るとは。危うくその見事な策に嵌まるところであつたぞ。おおかた、我が油断しきつたところで背後から奇襲をかけるつもりであつたのだろう」

「いや、そういうつもりは。純粹に会話を終わらせようかと。めんどくさいから」

「いや、貴様は、我を奇襲しようとしたのだ。そうだ。そうだろう」

「違うつてば」

「くうつ。なぜ貴様は我との崇高な会話を終わらせようとしたのだ。恐怖か。我が怖くて早く逃げ出したかったのか」

「いや、途中からそういう感情はなくなつたけど」
「なぜだ。ペネパ口。あんなに上手く会話できてたのに」

「お前、本気で言つているのか」「え」

言葉を詰まらせるペネパロ。俺は、構わず続けた。

「お前、アドリブ下手くそだろ」

「貴様あああああああ」

俺の会心の一撃により、激昂するペネパロ。自分でも薄々勘付いていたのだろう。その事実に。

だが、その怒りは俺の予想の遙か斜め上をいつていた。登場時の名乗りの時とは比べ物にならない程の気迫。空気だけでなく、地面や亀裂の斜面さえもびしひと音を立て軋む。

そこで俺は、思い出した。こいつが、大陸最強の種族であることを。やばい。やばい。やばい。しくじった。穩便に済ませるんじやなかつたのかよ俺。何怒らせてるんだ。本当に殺されるぞ。

俺は、頭をフル回転させてこの危機を乗り越える方法を考えた。ペネパロは完全に殺る気だ。両手の指の先からは『龍爪』と呼ばれる戦闘時のみに現れるという特殊な爪を生やしている。さらに、真っ赤な深紅の虹彩の中心にある瞳孔は黄色く変色していた。これも『龍眼』と呼ばれる龍人種族の固有スキルを発動している証だ。

絶体絶命。今回ばかりは終わつたかもしない、と最悪の結末を覚悟した。だが、意外にあつさりとその結末は覆ることとなつた。

「あ、ペネパロ、もう限界だ」

急にしゆんと勢いを失い、ぱたりとうつぶせに倒れるペネパロ。顔面を強打し「うぐつ。」とくぐもつた声をあげる。そして、ぴくりとも動かなくなつた。

・・・

「えーと、助かつたのか」

俺は、少し時間を置いてから、細心の注意を払いつつ、抜き足差し足でペネパロのそばまで近づいた。

「おーい。大丈夫か」

まつたく、お人好しにもほどがある。さつきこいつは俺を殺そうとしていたのに、何を心配しているんだ。自分でもその甘さを理解していながら、どうしても手を差し伸べてしまふ。それもこれも、全部兄貴の教えのせいだ。俺は、もし生きて兄貴に会えたなら、まずは一発ボディブローをかましてやろうと心に決めた。あんたのおかげで、俺の旅はアクシデントだらけだよ。

「ん。貴様」

顔を地面に埋めたまま返事をするペネパロ。

「何か、食べられるものを寄こせ」

そこで、つい先刻もの凄い勢いで落下してきたペネパロのことを思い出した。着地にしてはあまりにもお粗末だとは思っていたが、そういうことか。

俺は、はあつとため息を吐いた。

「寄こせじやないだろ」

「・・・何か食べられるものをください」

「はいはい」

俺は、踵を返して衝撃で吹き飛ばされた際に落としていた大事な鞄の元へと向かつた。はたして、龍人種族が食べられるような食材の持ち合わせがあつただろうか。